# 市長室から

宇城市長
阿曽田　清

## 米百俵とアカデミー

宮崎県日向市へ、日向駅周辺開発の勉強に行きました。

日向市では、平成3年より取り組みが始まり、高架橋の駅ができていました。あまりの立派さにもったいないと感じ、駅の建設費を尋ねてみましたら、「85億円です。駅の周辺開発については、現在進行中であり、予算は267億円です。ただし、見直しが必要だと思っています。このコンセプトは、バブル前だからできたのです。」と、担当の方がおっしゃいました。

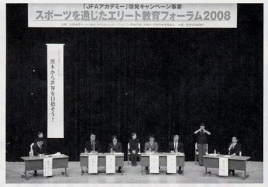
すると今度は、別の職員から、「JFAアカデミーを招致されたのは、市長さんのところ（宇城市）でしょう？　宮崎県はプロ野球のキャンプ地として有名でして、以前は、日向市も近鉄バファローズのキャンプ地だったのですが、今は、欽ちゃん野球チーム（※1）が一週間ほど来るだけですよ。サッカーはこれから世界のメジャースポーツですよね。日向市に欲しかったです」と話され、また別の職員からも、「招致や整備するのに、お金が掛かるでしょう？」と聞かれました。

私は、「はい。本当は県レベルで取り組むべき問題だったのでしょうが、県では取り上げてくれませんでしたので、市でやることにしました。財源は国と日本サッカー協会、あとは企業などの支援（寄附）によってやっていきます。そのため、市の真水（一般財源）はゼロです」と答えました。

次世代を担う子どもたちの育成のために、さまざまな財源を充てるアカデミーの取り組みを、説明すると、日向市側からは、「すごいですね。『米百俵（※2）』ではないですか。宇城市を知りませんでしたが、宇城市の名前も知ることができました。宇城市のPRになりますね」と感想を述べられました。

「日向駅開発の勉強」が、いつの間にかサッカーアカデミーの話題へと脱線してしまいましたが、松橋駅周辺開発計画は「身の丈を考えた開発を」が結論でした。

※1…茨城ゴールデンゴールズ＝タレント・萩本欽一が監督を務める社会人野球クラブチーム
※2…米百俵＝戊辰戦争で敗れ、窮乏していた長岡藩に対して支藩である三根山藩から米百俵の援助があった。藩の大参事小林虎三郎は、その米を藩士に分け与えず、売却し学校設立の費用とすることを決定する。藩士たちはこの通達に抗議するが、「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭し、自らの政策を押しきったという教育にまつわる故事



2月17日のフォーラムでは、未来を見据えた教育論が話し合われました。

※平成20年5月の市長談話室は2日㈮の予定です。参加ご希望の人は、総合政策課（☎32－1111）へ4月18日㈮までお申し込みください。

## 派遣職員の東京見聞録

市派遣職員が、今の仕事や市外から見た宇城市の様子を報告します。
今月は熊本県市長会東京共同事務所の野村烈さんです。

### モノの見方

It's easy to miss something you're not looking for

見ようとしていないものは見落としやすいといった意味だと思いますが、これは、たまたま目に入ったイギリスのCMのキャッチコピーで、どうやら自転車への注意を促すための広告のようです。

白と黒4人ずつのバスケットボールチームがあり、「白の方のパス回数を数えなさい」と指示されます。

両チームがパスを開始すると、つい真剣にパスをカウントしてしまうんですが、CMの最後に「ムーンウォークする熊に気付きましたか？」と聞かれます。私は「はぁ？」という感じでした（よろしければ試してみてください→http://www.dotheteet.co.uk/）。

ところで、よそのモノは良く見えて、「うちにもあんなのがあればなぁ」などと、ついボヤいてしまうことはありませんか？

一例を紹介しますと、東京で知り合った人に塩トマトをプレゼントした時、あまりの美味しさに私の方がびっくりするくらいのリアクションがありました。食品関係の方を訪ねたときは、「ばってんナスがなぜ大ヒットしていないのかが分からない」と力説されました。

私たちは私たちの尺度でモノを見ています。でもその尺度だと、今見ているモノの良さを見出せないかもしれません。

今の尺度で良いモノを作るのも素晴らしいことですが、今見ているモノを、尺度自体を変えて素晴らしいモノにする、または、素晴らしいところを見出すのもアリではないかと、少し暴論ながら考えさせられるきっかけとなったCMでした。

地元産トマトを使った新商品、アグリパーク豊野で販売中！



# 市民レポーターの目

## 花のある町―宇城市―

瑞穂　その

今年の冬は寒暖の差がはげしく、春の訪れを待ち遠しく感じていたのは私だけではないでしょう。

最近の異常気象をみてみると、自然が変化しているのを感じずにはおれません。しかし、自然の力は偉大なもので、立春の声とともに春の息吹が感じられる今日このごろです。

先日、春の陽気に誘われて、家の近くを歩いてみました。どこからともなく梅の香りが漂い、庭のパンジーやノースポールも花を付け、いよいよ春到来です。

花植え後、笑顔がまぶしい会員たち

最近は、各家庭に花が多くなり、また、町の通りの花壇にも色とりどりの花が咲き、道行く人の目を楽しませてくれます。

昨年11月、松橋町南11区内の花壇に花を植えている11区南花クラブ（杉本隆英会長）の人たちに出会いました。春と秋に花の植え替えをし、毎月第2土曜日の午前中に草取りや水やりなど、花の世話をしているそうです。

夏の草取りや水の管理が大変だけど、元気に育ち、きれいな花を咲かせた時はその苦労も忘れてしまうと話されました。しかし、現在花クラブの会員数は10数人、なかなか増えないのが、悩みの種だそうです。

ある時、小学生の女の子が草取りの手伝いに来てくれたときは、会員一同大変うれしかったそうです。感激した入江康之区長が、わざわざ女の子の家にお礼に行かれたという話を聞き私も感動を覚えました。

会員の中には、松橋に引っ越してすぐ花クラブに入った人もいて、花作りを通して地域の人たちと触れ合う楽しみを感じているようです。

また、松橋町曲野の村田俊子さん宅の庭も工夫を凝らした花壇作りがなされ、時期になると見学に来る人も多いそうです。

村田さんは、花の数量だけでなく、空間を大事にすることも考え、青系の花を中心に白、ピンクの花が引き立つように色彩を考えた花壇を作っています。草花を植えることにより、市の環境美化はもちろんのこと、地球温暖化防止にもつながればと願っておられます。また、自分で楽しむだけでなく、多くの人の心を癒やすことができればと話されました。

宇城市では、それぞれの地域の道沿いに花壇が設けられています。また、各家庭でも工夫を凝らした庭作りがされているようです。

一つ一つの小さな環境美化づくりの輪が広がって大きな輪となり、地球環境を守る力になるのではないでしょうか。

工夫を凝らした彩りの村田さん宅

## ティモシー・ニーベ先生の日本つれづれ日記

### 私の故郷

私は、ニュージーランドのオークランド出身ですが、日本に来る前は2年間タウランガという町で働いていました。

タウランガはベイ・オブ・プレンティ地方にあり、ニュージーランドの中で最も成長の早い都市です。ここ25年で人口は3倍となり、現在はおよそ10万人が住んでいます。

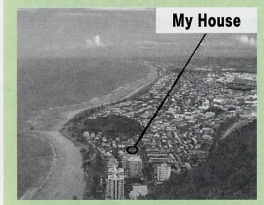
このまちの美しいビーチと港は大変有名であり、港の入り口にはマウンガヌイ山と呼ばれている有名な火山があります。夏の間は、ほぼ毎日そこを歩いていました。その眺めはすばらしく健康にもいいです。歩いた後には、泳ぎに行っていました。

夏になると町には、泳ぎに来る人やサーフィン、セーリングをしに来る人たちで賑わっています。気温は、日本の夏ほど暑くはなく25℃前後。冬でも、15℃くらいと温暖な気候です。しかし、オゾンホールがあるため、もし、日焼け対策を何もせずに外に出たらものの20分くらいで日焼けしてしまうと思います。

このまちの唯一の欠点と言えば、人気が有りすぎたために、とても早く成長してしまったことによる病院などの福祉施設の不足や交通量の増加に伴う新しい道路の必要性でしょうか。

それでも、私はニュージーランドの中で、タウランガが住むには一番良い場所だと思います。タウランガで働いていた時は本当に楽しかったですし、日本から帰ったら、またそこで働きたいと思っています。

いつか、皆さんもタウランガに来てみてください。



丸印の場所に住んでいました